

【高校生の部】 作文部門 優秀賞

「私達ができる省エネと脱炭素化」

柴田学園高等学校 2年 ^{なかはた} 中畑 ^{りき} 利彩

私達は授業でいつもいる教室を離れて別の教室へ行くときに照明の電気をつけたまま他の教室へ行ってしまうことがよくある。そのときには教室へ戻ると必ず、「電気を消すこと！」と見回りの先生に注意を書かれてしまっている。この言葉は小・中学校からよく言われてきた言葉だった。それにもかかわらず言われ続けているのはなぜだろう。

それは、本気で省エネルギーのための節電をだれも実行しようとしなからだと思う。私は、だれかがやってくれるだろうと思ったり、めんどくさいと、いつも他人の力に頼っている。先生もただ電気を消してほしいと言うだけでおしまいである。どうしたら電気を消すことを定着させることができるのだろう。

省エネルギーが定着しないのは私達は電気をつけたままにすると、どれほどのエネルギーを使い地球に大きな負担をかけるのか無知で無関心だからなのではないだろうか。

蛍光灯をつけると、教室一個分で七百十四ワットかかっているのである。つまり五十分つけたままにすると、二千三百二十二キロワットかかっているのである。一般家庭なら六日分以上である。この教室でこれだけ消費するのだから全校でどれほど消費するか。そんな学校がいくつもあるとすればどんなことが起こるのだろう。これほどの浪費である電力を使っても私達はわかっていなかった。何よりも何の役にも立たないように思われるのは、節約した結果が自分たちに返ってこないのである。義務だけで、良いことをしたことへのごほうびがないのだ。

省エネルギーと環境の問題について私達は日常的に車に乗ったり、エアコンをつけてたりすることで多くのエネルギーを消費している。また、エアコンなどの温度の調節によって本来の自然から離れ自然に大きな負担をかけている環境の変化に鈍感になっている。

例えば、学校の近くの川の水が昔は澄んできれいだったはずなのが洗剤で泡立っている。水質の劣化が影響してトンボなどの昆虫が減ってしまったと、昔のことを知っている人たちは言っている。

環境への無関心というのは昔からもあるのである。日本史で習った明治時代には産業が発達し、工場がたくさんでき、大量のエネルギーを消費し始めた時代である。しかしその裏では、健康被害が問題となった。足尾銅山鉱毒事件がその一例だ。銅の精錬時に出た煙が原因で酸性雨が降り、森の木々が枯れた。また、鉱毒が含まれた水が川に入り、川の魚が死んだ。それを食べた人が中毒になり死者もでた。衆議院議員だった田中正造が天皇に直訴するまで事件があったが、今の問題としてあまり注目されていなかったのではないか。

しかし、足尾銅山鉱毒事件の教訓を活かし四日市ぜんそくのように公害を克服できたところもあるのではないだろうか。

脱炭素化というと化石燃料を使わない発電方法は原子力発電が一例に挙げられている。福島
の原子力発電所の事故が起こった。その被害の処理に六十年以上かかるのである。また、フランス
から再処理をされた燃料が運ばれた時には、雨にあたって、大量の湯気が上がっていた。熱いの
である。燃料は死んでいるのではなく、まだ熱を出す生きたものなのだ。初めて、燃料を再処理す
る時に、大量の二酸化炭素を排出する工程があることを知った。この問題を知っている人はいない
と思う。この問題についての資料を発見するまで時間がかかった。つまり、原発は脱炭素化とはあ
まり関係がないようである。

エネルギーの大量使用による二酸化炭素を大量に排出してしまうことになる。洗剤を含むゴミを
減らさなければならない。目に見えず、すぐには感じられないので、自分たちの感覚が離れるの
だ。だから、どこか他人ごとのようになるのだろう。

エネルギー問題について学校で消費していくなかで起こる問題は現代社会の公害の授業に一
度だけとりあげただけだった。友人ともエネルギー問題について話題にならず、真剣に考えたことも
なかった。思い返すと、中学の社会の授業では地球温暖化の対策を考えたときに、ゴミを減らすと
ただ書いてあるだけだった。どのように減らすかまで具体的に考えていなかった。つまり先生方を
含め私達は環境問題に対して本当の理解にいたる知識を持っていなかったのである。

太陽光や風力発電では発電のコストがかかると言われている。代替エネルギーは省エネだけで
なく、私達が生活するためのお金を節約する必要があるのではないか。日本には質素に生きること
を美德とした文化があり、「もったいない」と世界で評価されている精神がある。

私達が今すぐ行動できることは、学校内で電気を消し忘れたら、先生が記録をとって、クラスごと
に節電競争し、評価してみるというのはどうだろうか。それを地域の学校間、全国の学校に広げたら
よいと思う。

しかし、学校規模によって、もともとの消費電力が違うので、総消費の何パーセントという目標に
して比べれば良いと思う。

環境の変化に気づくセンスをみかくためには、学校の理科の自然観察や国語では昔の人の自
然についての感性を俳句や短歌、詩などに触ることも大切なかもしれない。

学校の授業の中で、環境問題をもう少し考える場が必要である。また、私達も一緒に考えなけれ
ばならない。このような考える場を与えてくれた作文コンテストに感謝します。もったいないの精神を
もっと考えてゆきたい。